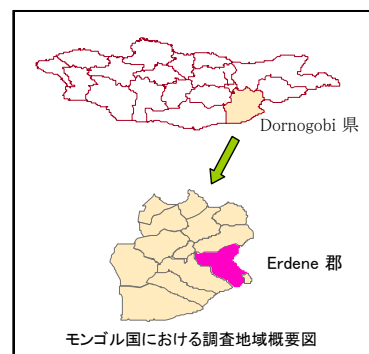


## ミニシリーズ 遊牧社会の小窓から ～モンゴル遊牧民と市場経済 (1)

AAI News 第45号でふれたように、1990年代はじめモンゴル国(以下、モンゴル)では70年ちかくつづいた社会主義時代が終焉し、市場経済体制への仲間入りをはたした。しかし首都ウランバートルへの一極集中や貧困層の増大、自然災害などにより不安定な経済状況がつづいている。そのためモンゴルへの国際協力において都市とのバランスのとれた地方開発については遊牧の活性化が最重要課題のひとつとなっている。遊牧注)は長年月にわたり広大なモンゴル高原を持続的に維持管理してきた土地利用方式である。しかし遊牧は農耕を基盤として成立する現代文明とは異質な側面をもっており、こんご遊牧社会が市場経済の大海原をどのように航行していくのか、いまだ未知の部分がおおきい。たとえば、集住をせずひろい土地を分散的に利用し、人口を希薄な分布形態にたもつことを理想とする遊牧にとって、人口の集中するマーケットをめざした経済行動は、往々にして市場アクセスに有利な都市近郊に滞留する事態に陥りがちである。同一場所への長期滞留は、遊牧に内在する草原ないし環境保全的な根本原理に矛盾し、草原荒廃をまねく結果となる。このように伝統的な遊牧原理と強力な引力をもつ市場原理とをいかに融合させ両立させていくか、この難題に対する果敢なチャレンジが要請されている。現在モンゴルでの開発調査において、畜産物の製造・加工方法の改善ならびに製品の共同集出荷もしくは流通・販売のさまざまな可能性をさぐりつつある。これら一連の活動は、現金収入の機会を拡大させ安定させることを第一目標に実施されている。しかし同時に草原利用との調和という遊牧を維持し持続させる環境系への目くばりをふくめた複合的な視野が不可欠であろう。このミニシリーズでは、特定の草原への極端な集中による過剰利用をもたらさないよう環境面での保全に腐心しながらすすめている乳・乳製品出荷販売プロジェクトからふたつの事例を紹介する。



第一の事例は、中国と国境を接するドルノゴビ県エルデネ郡(地図)の遠隔低利用草原における出荷販売拠点づくりの試みである。エルデネ郡中西部はブルデネと呼ばれ、小砂丘が折りかさなる谷間の湿地にザグ(*Haloxylon ammodendron*)という低木が混生している美しい景勝地である。ここに腎疾患の療養所が立地しており、毎年6~8月にかけて治療と保養をかねてモンゴル国内の各地から患者が集ってくる。この療養所では夏の太陽に熱せられた砂丘の砂で全身をおおい発汗をうながすというモンゴル伝統医学の独自の治療方法がおこなわれている。そして発汗でうしなわれた水分を補給するためにラクダ加工酸乳であるボツァルガーを積極的に利用している。したがって療養所では夏場の一時期、ラクダ乳の需要が急速にたかまり、周辺を遊動する牧民にとってはラクダ乳販売のビジネスチャンスが生まれることになる。調査団では、療養所での乳・乳製品の出荷・販売に着目し、その販売強化へむけて、井戸建設による給水整備のほか、ミルクの仕入れ価格や施設利用料金など療養所経営の再検討、またそのほかの運営に関する提言・指導・アドバイスを実施し、ソフト面をふくめた多面的な改善をモンゴル側と共同でおこなってきた。まだまだ試行錯誤の段階にあり、すべての活動が順調に回転しているわけではない。また周辺の草の生育状態など毎年の天候条件に左右される脆弱性は避けようがない。そうしたなかで療養客と牧民の双方に満足がえられるような魅力的で活気のある療養所の運営体制構築を目標にしている。さらに、こうした活動の先にめざしているのは均衡のとれた草原利用である。療養所にせよ都市にせよ広大無辺な草原のなかの人為的構造物は芥子粒の点でしかない。しかし、限られた都市部周辺や利便性のある道路・鉄道沿い以外の遠隔低利用地にも季節的な畜産物市場が形成されれば未開発草原の単なる有効利用にとどまらず、特定草原へ牧民の集中が緩和されていくであろう。モンゴルにはブルデネ以外にも腎臓病療養の類似施設がいくつか存在する。他方で、宿泊用ゲルキャンプにみられるエコ・ツーリズムも近年注目されており、経済開発への期待がしだいにたかまってきている。観光客や療養客があつまるこれらの場が将来整備されていけば、出荷販売拠点として牧民が小集合しつつ適正な分散を維持する草原利用につながっていくことが予想される。畜産物の販売機会の拡大は都市部にもみつけられるのではなく、遠隔低利用草原においてもじゅうぶんに発展の余地がある。ブルデネ療養所での乳・乳製品集出荷販売へのわれわれのこ入れにはこのような願いがこめられている。(つづく)

注)遊牧という言葉にはその語感にもなう直観的イメージもあいまって用語法にさまざまな混乱がみられる。生業類型として定義される牧畜とは、群居性有蹄類家畜を放牧飼養し、衣食住のほとんどすべてを家畜生産物に依拠する生活様式である。また採集、狩猟(漁労をふくむ)、農耕とならび人類をささえてきた4大基本生業の1つとされる。しかしその形態は地域、時代によりさまざまなバリエーションが存在してきた。本稿でいう遊牧とは牧畜の一形態であり、遊動に規則性があるなしにかかわらず、原則として定住家屋を有せず居住地を家族単位で季節的に移動させる牧畜をさすものとする。また上述のスタイルで遊動する人々を遊牧民あるいはちぢめて牧民とよぶ。

## ミニシリーズ 遊牧社会の小窓から ～モンゴル遊牧民と市場経済 (2)

AAI News 第 47 号につづいてモンゴルの遊牧民(以下、牧民)の乳製品出荷支援活動について経過報告をする。前回ゴビ砂漠に存在するブルデネ腎臓病療養所における製品の出荷拠点の開発をひとつの事例として紹介した。ここでの課題は低利用・未利用地となっている草原の有効的活用であった。今回とりあげる第二の事例は、まとまった集乳システムがなくなった市場経済下の現在において、牧民が自力で都市部へと出荷・販売する取り組みである。既存のインフラである鉄道をうまく利用し、「チェンジ」と呼ばれる卸業者の手を介さず直接販売する。したがって流通マージンをとられずに牧民側の利益を最大にすることが大きな目標となる。またカシミア生産、肉販売という現在おこなわれている現金獲得のための手段が内包している問題点、たとえば収入源の季節的かたよりの問題やヤギ生産偏重による草原植生への負荷のたかまりという環境問題を解決していく糸口として第三の現金収入源創出としての乳製品出荷を提示することも重要な視点である。

他方、モンゴル国の首都であるウランバートルや地方都市のマーケットで売られている乳・乳製品はほとんどが外国からの輸入品である。人口約 280 万人に対し家畜頭数が 3000 頭前後で、地方の草原にでかければゲル(家庭)内で豊富な乳・乳製品が生産・消費されているというお国柄であるにもかかわらず、である。これはひとえに社会インフラの未整備、未発達から国産ミルクの集荷、貯蔵、流通がうまくおこなわれないからであろう。空輸や鉄道輸送によりもたらされる諸外国からの輸入品のほうが長距離輸送に耐ええるということだ。しかし、わたしはゲルで生産される「ツァガン・イデー」すなわち白い食べ物と称される伝統的な乳・乳製品は、一定の衛生管理や品質管理にさえ気をくれば、都市部において確実な需要が見込まれ市場で通用すると踏んでいる。たとえ大量輸送はむずかしくても、お世辞にもおいしいとは言えない輸入品よりモンゴル人の都市部消費者がお袋の味として記憶にとどめている伝統食品の味を市場の隙間をつくかたちで都市へと届けることは十分に可能だと考えている。伝統食品そのものが稀少価値をもつことから市場で付加価値がつくとおもわれるが、ゴビのラクダ乳であればますます珍重され、さらに高い値段で取引されることが期待される。問題は、牧民世帯内の少ない労働力でしかも少量ずつ(1~2liter/day)しか搾乳されないラクダ乳をいかに経済効率よくかつ安全に輸送できるかにかかっている。



エルデネ郡で生産されたラクダ発酵加工乳 (エルデネ郡役場撮影)



毎年1月ドルノゴビ県でおこなわれるラクダ祭 (エルデネ郡役場撮影)

さいわい JICA の開発調査での活動を機縁に知り合ったドルノゴビ県エルデネ郡の牧民のなかには自分たちの力でなんとかラクダ乳ほか乳製品を出荷・販売することに大いなる意欲をもった人たちがいる。また郡役場の人たちは1郡(ソム)1産品運動としてラクダ乳のブランド化を推進していこうと意気込んでいる。これらモンゴルの仲間たちのやる気にこたえて、乳・乳製品の生産と流通上の困難な課題をいっしょに解決するため今後も草の根レベルでのゴビ通いをつづけていきたいと考えている。